福井大学附属図書館報
NO.12

図書館forum

多様な学びを支援する図書館の活動…… 寺尾　健夫　1

■福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む（2）
「自力」で村を守る人びと
―延宝 4(1676)年、野中村仁蔵・善吉の詫状から― … 長谷川裕子　3

■福井大学附属図書館所蔵の古典籍（9）
『絵本霞の海』
―上方浄瑠璃と〈おどけ開帳〉― …… 膳吹　覚　6

電子書籍配信サービス「BookLooper」の紹介 …… 9

総合図書館展示企画 2014 …… 11

■私の推薦書
英会話の入門に適した指導書
“英語はインド式で学べ！”…… 塩島　謙次　13

英語教育という陥穽―英語力より教養力を … 高山　善行　14

なぜローマ人だけが、あれほどの大を
なすことができたのか『ローマ人の物語』… 法木　左近　1

医学図書館リニューアル 2014 …… 18

主な行事等…… 19

多様な学びを支援する図書館の活動

附属図書館長　寺　尾　健　夫
てらお・たけお

最近の生涯学習では、体験型や参加型の講座の人気が高くなっています。陶芸、遺跡発掘現場や工場の見学などです。どうしてこれらの学習が好まれているのでしょうか。

私はその理由の一つとして、能力のとらえ方の変化があげられると思っています。これまで重視されてきた能力は、特に学校では言語的能力や論理・数学的能力です。確かに私たちの周りでも、数学・英語・文章が得意な人が賢いと評価される傾向があります。しかし、年齢を重ねるにつれて一層大切になってくる能力は、自己や物事を省察する能力、自分の好きなことを楽しむ能力、身体運動的能力、対人関係能力等だと私は思います。

このような様々な能力はすぐに身につくものではありません。若いうちから自分なりの情報のアンテナを張り、様々な場で色々な経験を積み重ねることで得られていくものでしょう。

そこで、学生の皆さんが多様な能力を身につけるアクティブラーニング(注)の場を提供出来るよう、図書館では次のような様々な工夫を行っています。これらの情報は学部の掲示板で最新のものを示していますので日ごろから注意してみておいて下さい。

●ラーニングコモンズの提供

ラーニングコモンズ（LC）とは、図書館が学生の皆さんに提供する「学習の場」です。ふつう「図書館では静かにしましょう」といわれますが、ラーニングコモンズのスペースでは会話は自由です。グループ学習用の机（PC電源

装備）が用意されています。複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていくグループ学習ができるのです。図書館では、皆さんの学習が活発になるように、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使って自学・自習できるように支援します。必要な事があれば気軽に図書館の職員に声をかけて下さい。

●ラーニングアドバイザー（LA）

皆さんの日々の学習・試験勉強や就活・進学などについて、教育・地域科学と工学の経験豊富な大学院生が相談に乗ってくれ、アドバイス

ももらえます。4年前にできた制度です。LAとして誰がいつ担当しているかというラーニングアドバイザーのスケジュールは図書館ラウンジ前にあります。利用についての質問や予約は、カウンターや次のアドレスでも出来ますから利用して下さい。

→ la-reserve@ml.cii.u-fukui.ac.jp

●グループ学習室

図書館一階にあり、5～6人のグループで利用出来る部屋が3室あります。一回2時間利用でき、移動できるホワイトボードやノートパソコンも貸し出しています。カウンターまで気軽に声をかけて下さい。

＜最後に学部の先生方へのお願い＞

附属図書館から学部の先生方にお願いがあります。それは、授業で学んだことやそれを発展させることができるような本を、授業の中で学生に積極的に紹介していただきたいということです。そういう本が図書館にあれば、学生が図書館に足を運ぶことも多くなり、授業での学びがさらに深いものになると思います。授業の学びから図書館での学びへ、図書館での学びから授業の学びへ。このサイクルを一層活性化したいのです。

紹介したい本、所蔵が必要と思われる本はリストしていただければ図書館で揃えます。ぜひご協力下さい。

(注) アクティブラーニングとは？→教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習方法の総称です。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、グループディスカッション、ディベート、グループワークなどをします。

（教育地域科学部社会系教育講座　教授）

福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む（2）

「自力」で村を守る人びと―延宝4(1676)年、野中村仁蔵・善吉の詫状から―

教育地域科学部社会系教育講座准教授　長谷川　裕　子
はせがわ・やすこ

100年にわたる戦国時代が終わりを告げ、武力行使のない「平和」な世の中をめざした江戸幕府が開かれて70年余りが経った延宝4（1676）年。越前国坂井郡野中村（現福井県坂井市三国町野中）は、盗人騒ぎに揺れていた。福井大学附属図書館に所蔵されている「小島家文書」のうち、延宝4年9月17日付で「村中」に充てて出された野中村の仁蔵と善吉の詫状が、この盗人事件の詳細を語ってくれている（4192号文書。以下「小島家文書」については目録番号のみを示す）。

それによれば、現在の暦では10月22日にあたる旧暦の9月15日の夜、野中村の村人が、同村の源助・善九郎両人の稲を盗んでいる善吉と仁蔵を見つけて取り押さえた。そこで村人たちは、野中村百姓による盗人事件についてただちに「御公儀様」のもとへ「御断」を入れ、盗人の百姓らを村から追放しようとした、というのだ。「御公儀様」とは、当時野中村の領主であった福井藩6代目藩主の松平綱昌を指しているが、注目されるのは盗人事件への対処の仕方である。村人たちは、稲を盗んだ百姓を「自力」で捕まえている上に、すぐに藩主へ報告をしつつも、盗人に対する処罰は、藩主からの命令を待たずに村の中で決定しているのである。現在であれば、このような刑事事件は警察に届けるべきところであるが、当然江戸時代には警察は存在しないし、藩や幕府の役人が自発的に捜査に乗り出してくれるわけでもない。江戸時代では、犯人逮捕から処罰まで、基本的には村の裁量に任されていたのである。

そもそも近代以前の社会では、村の中で起こったさまざまな事件への対応は村の「自力」に委ねられていたところが大きい。その権限は、中世社会では「自検断」と呼ばれ、特に「盗み・放火・殺人」の三大事件（村の大犯三箇条という）に対して、村は厳罰をもって臨んでいた。例えば、近江国菅浦村（現滋賀県長浜市西浅井町菅浦）では、村の中で盗みが発覚した場合には、村人たちが寄合を開いて処罰を決定すると「村掟」で定めている。また、和泉国入山田村（現大阪府泉佐野市土丸・大木）では、わらびの粉を盗んだ同村の寡婦や子どもが、見張りをしていた村人に見つかって即座に殺害されている。当時、入山田村の領主であった九条政基は、殺害された百姓を哀れみつつも、「盗人だからしかたがない」と、村人らの処罰に理解を示している。公家社会で関白まで務めた九条政基でさえも、盗人に対する厳しい制裁、および村の「自力」を認めていたのである。

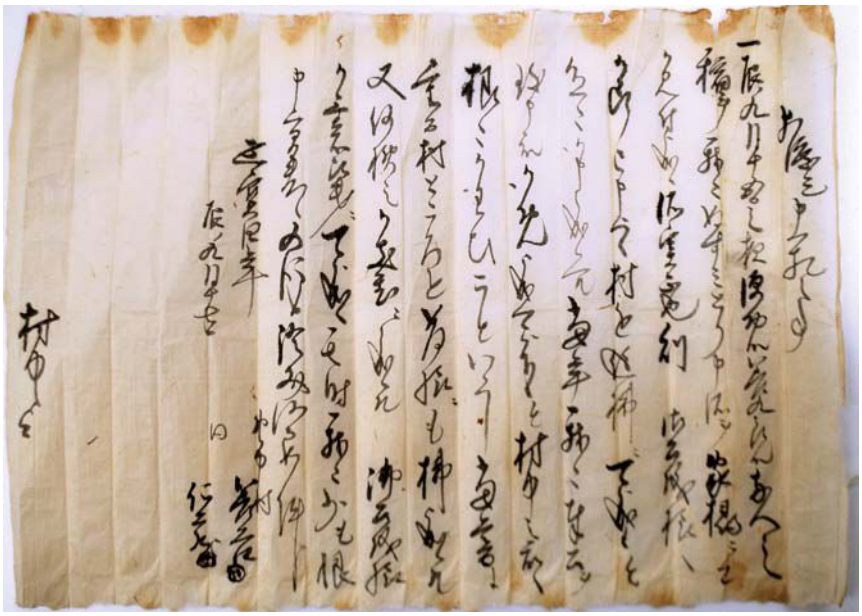
人びとの武力発動が禁じられた近世社会では、さすがに中世のように現行犯の犯人を即座に処刑してしまうような事態は忌避されたのであろう。今回の事件では村からの追放という処分であった。追放刑なら死罪よりはまし、と思うかも知れないが、実は追放刑もなかなか厳しい処罰である。というのも、村から追放されるということは、所属を失うということであり、村に住めないばかりか、村の保護を得られないことを意味している。したがって、追放された百姓がどこでどんな目に遭おうと、誰も助けてくれないのである。現代社会であれば、たとえ国籍を失って難民となっても、人道的側面から救済が得

られる可能性はある。日本の前近代社会では、村を追われた者が行き倒れになっても、追い剥ぎにあっても、基本的には放置されるという意味で、追放刑は村人が直接手を下さない死罪に等しいものであったのだ。

このように、村は犯罪を処理する独自の仕組みを作り上げていたわけであるが、では稲を盗んだ仁蔵や善吉が村人に見つかってしまったのは、はたして偶然だったのだろうか。連日のわらび粉の盗難に対して見張りを立てていた入山田村のように、野中村でも村人に交替で番をさせて盗人を警戒していたようである。この事件の少し後の延宝9(1681)年4月、野中村では「村中麦番」を6人1組に定め、暮れ六つ（午後6時頃）から明け六つ（午前6時頃）まで務めるよう、村人18人が署判を据えて取り決めている（4822)。その6人とは、同年8月の「村中究法度」によれば、「稲番・豆番相談の衆」を3組に分けて、1組から2人ずつが番に出るよう定められた人たちであった（4840)。野中村でも、村人の作物を守ために、収穫期に見張りを立てていたのである。

しかも、これら村掟のおもしろいところは、番を立てていながら稲や麦が盗まれてしまった場合には、見張りの者が盗まれた分を弁償するように定められている点である（4688・4822)。番を休んでしまった時には「過料銀」（罰金）を支払うという取り決めがあることからも、「番を務めるのは当たり前、番を務める以上は盗人を逃すな」という当時の村人の「覚悟」が垣間見えよう。それほどに、収穫物を盗まれることは村人にとって、ひいては村全体にとって深刻な問題だったのである。一方で、盗人を見つけた者へは「礼銀」、すなわち報奨金を与えるとしている。しかも、延宝8年8月には銀20匁であった報奨金が（4688)、翌年8月には銀10匁に減額されていることからは（4840)、当時の盗人の多さをうかがい知ることができよう。

ではなぜ、仁蔵と善吉は稲を盗むという行動に出たのだろうか。一番の大きな要因は「飢饉」であろう。江戸時代では、寛永飢饉（1642年）・享保飢饉（1732年)・天明飢饉（1781～89年)・天保飢饉（1833～36年）が四大飢饉として名高いが、延宝3（1675）年と同8（1680）年にも大きな飢饉が発生している。この二つの飢饉は、元和5（1619）年と寛永飢饉と合わせて、近世前期における四大飢饉の一つに数えられており、風水害や冬の大旱による凶作によって越前の農村は大きな被害を被った。「橘宗賢伝来年中日録」（福井県立図書館文書）は、「延宝三年卯天下飢饉、別して越前人多く死に、穴を掘り死人を埋

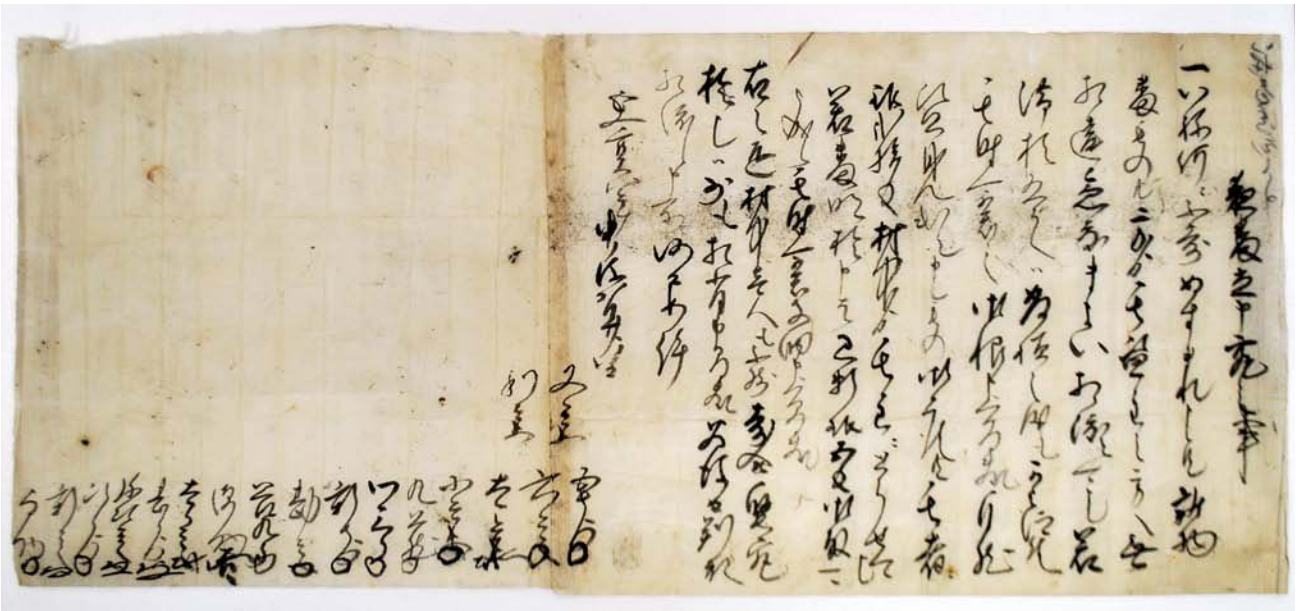


延宝4(1676)年9月7日　相渡シ申一札（野中村仁蔵・善吉詫状）(No.4192)

める。同八年申越前飢饉人多く死す。山奥石ヶ谷・立屋小山谷・平岡、右三ヶ処に穴を掘り死人を埋める」と、多くの死者が出たことを記している（『福井県史』通史編４近世二。以下、『福』と略記する）。

飢饉が起こると、当然のことではあるが、百姓は領主への年貢を納入できなくなる。福井藩松平家の記録である「家譜」（松平文庫）にも、「当年大飢饉につき収納相滞る」と記されているように（『福』）、仁蔵と善吉も年貢の支払いに窮したようである。延宝３年11月19日、仁蔵と善吉は前年の年貢未納分である１石９升７合７夕と、延宝３年の年貢納入のために２人の所持地を抵当に入れて銀85匁を、村の富裕者であった小島家から借用している（4352・4418）。さらに同日、延宝３年12月から翌年11月までの間、１ヶ月に25日ずつ小島家に「御奉公」する代わりに、「給恩銀」として43匁５分５毛を前金として受け取り、藩主から拝借していた「作食銀（さくじき）」の返済に充てている（4225）。延宝２年の凶作から始まった飢饉の中で、仁蔵と善吉が相当困窮していた様子がうかがえるが、彼らは村の中でとりわけ零細な百姓だったわけではなかった。彼らは、７石２斗２升６合の持高を所持する「一軒前（いっけんまえ）」の百姓であった。しかしこの飢饉では、持高19石余の百姓でさえ、所持地を抵当に入れて借銀をしているように（4419）、野中村の百姓の多くが困窮していたのである。こうした状況が、盗みに走らせたであろうことは想像に難くない。ちなみに、彼らが盗みに入ったのは、延宝３年に彼らの借金の保証人となっていた源助の田地であった。

さて、その後仁蔵と善吉がどうなったのか、再び彼らの詫状に戻ってみよう。詫状には、「当年我々奉公を致し申すゆえ、御免（ごめん）成され下さるべくそうろうと、村中の衆へ根々詫言いたし」たとある。本来ならば、即座に村から追放されるべきところであるが、「年内は何とか村に置いてくれ」と彼らは訴えたのである。「村中」充てに詫状を出したということは、この要求は受け入れられたのだろう。また、この暮に村を追われても、その他どのような処罰が下されても「御公儀様御意（ぎょい）次第」に任せると詫状にはあるが、その後の行方ははっきりしていない。しかし、延宝５（1677）年11月18日の年貢算用帳には、年貢銀を納入した百姓の中に「仁蔵」の名前がみえている（692）。この「仁蔵」が盗人犯と同一人物だとすれば、仁蔵らの罪は許されたのかも知れない。飢饉が頻発し、多くの百姓の命が失われる江戸時代では、耕作をして年貢を納入する百姓は、村にとっても、領主にとっても、大切にすべき存在だったということであろう。



延宝８（1680）年閏８月28日　夜番立申究之事（No.4688）

福井大学附属図書館所蔵の古典籍（9）

『絵本霞の海』 ――上方浄瑠璃と〈おどけ開帳〉――

国際交流センター准教授　膽吹　覚
いぶき・さとる

（表紙）

今日ではほとんど見られなくなってしまったが、江戸時代から明治時代にかけて見世物が盛んに行われていた。江戸ならば、上野奥山、東両国回向院などを会場にして、小屋を建て並べ、巨大な籠細工、生人形、軽業、曲馬、手品、珍獣、蛇遣いなどのさまざまな見世物が民衆の好奇心を満足させていた。近世の見世物については、朝倉無声『見世物の研究』をはじめ、延広真治『日本庶民文化史料集成８寄席・見世物』、川添裕『江戸の見世物』等に詳述されているので、興味のある方はそちらをご覧いただきたい。

江戸の見世物の代表的なものの１つに〈おどけ開帳〉がある。〈おどけ開帳〉は「寺社開帳もどきに勝手放題な偽の宝物をならべ、それを面白おかしく絵解き、地口でこじつけるというもの。興行小屋のこしらへも、木戸口は寺の楼門、舞台は寺の内陣、客殿風、音曲は木魚と、あくまで寺をまねて茶化していたのである」（川添『江戸の見世物』ｐ 26）。本稿で紹介する『絵本霞の海』は、こうした〈おどけ開帳〉を写した冊子である。

本学所蔵の『絵本霞の海』（以下、福大本）は１冊の版本である。請求記号は 779.2 ／ EHO。縹色布目表紙。４ツ目綴（改綴）。半紙本（21.1×15.1）。角裂なし。表紙左肩部双辺刷題簽「絵本霞の海」。内題･柱題･尾題なし。全７丁。ただし、第１丁（「開帳三」）は表紙見返しに、また第９丁は後表紙見返しにそれぞれ貼り付けられている。版心はなく、丁付は各丁左下隅に「開帳三（～八）」とある。識語･刊記ともになし。表紙は摩滅し、全体的に草臥れているが、題簽も辛うじて残っており、本文は虫損も少なく、この種の冊子としては、保存状態は普通であろう。福大本はしかし、上述の通り「開帳三」から始まっており、少なくとも巻等の「開帳一」と「開帳二」が落丁している可能性が考えられる。管見に従えば、『絵本霞の海』は本学以外では国文学研究資料館と静岡大学の２箇所に所蔵されているが、筆者は未だこの２点を調査していない。ゆえに、本稿は福大本のみを資料として論じるという極めて不十分な論考であることをお断りしておかねばならない。

（図１　開帳三）

（図２　開帳七）

さて、本書第１丁（「開帳三」・図２）を開くと、絵の中央部では、七条袈裟を着た僧侶が双輪数珠の入った箱を持ち、拝観者（見物人）に向かって、「釣船の三婦がじゅす（数珠）、一度拝するともからハ、まをとこ（間男）のなん（難）をのが（逃）れます」との口上を述べている。「釣船の三婦」は竹田出雲他作『夏祭浪花鑑』（延享２年・大坂竹本座初演）に登場する老侠客である。その第６段目「三婦内」、信心のために喧嘩を止めていた三婦であったが、止むに止まれぬ状況となり、耳にかけていた数珠を引きちぎり、無頼の輩と大立ち回りとなる。僧侶が箱に入れて見せているのは、この時に切れた数珠である。僧侶はこの数珠が「間男の難を逃れる」ご利益があると説く。その訳は三婦が数珠を引きちぎる前の場面で、徳兵衛の女房のお辰が追手から逃走中の磯之丞を連れて帰ろうとする。しかし、三婦は二人の間に関係ができてしまうことを懸念する。すると、お辰は傍の火鉢にあった焼けた鉄串をその顔に当てて痛々しい傷を付ける。これではさすがの磯之丞もお辰に手は出せないというのである。

絵の左中央部の女性が両手で持っている竹は、「大星ゆらの助、此竹につるをかけて、高のもろなをがやしきの雨戸をはづさせたる竹なりけり、当寺の什物と成なり」と説明されている。つまり、この竹は竹田出雲他作『仮名手本忠臣蔵』（寛延元年・大坂竹本座初演）で、高帥直邸に討ち入った義士が、その雨戸を外す時に使ったものであるというのである。この竹は「災難除の竹」として開帳（陳列）されている。

三婦の数珠も義士が討ち入りに使った竹も、いずれも浄瑠璃（芝居）の中で使われた小道具である。こうした有名な浄瑠璃所縁の小道具（細工）を「寺の什物」「宝物」として開帳し、拝観者（見物人）にご利益を授けるというのが、この開帳（見世物）の趣向（遊び心）なのである。当世風に言うならば、大ヒットした映画の中で使われた小道具を陳列して、そこに何らかのご利益をこじつけたようなものである。なお、この開帳が実際に開催されたものであるか、あるいは冊子上の架空の開帳であるかは不明である。

本書にはこうした浄瑠璃（芝居）所縁の「什物」「宝物」（細工）が次々と登場するが、その全てをここに解説することは紙面の都合上できないので、その第７丁（「開帳七」）を例として掲げる。

図２の中央部、盤台には合戦をしている兵士たち、絵の右上端、崖の上にはその模様を眺めている男が２人。これは絵の右端の解説文（口上）に「九仙山ハごさんけい腐たるほこの柄をもつて忞がゝれし所也。並三重之しゆり塔、此二ツの宝物一度拝するともがらハ、三年と三年合て六年の寿命をたもつ、当寺第一の宝物也」とある通り、近松門左衛門作『国姓爺合戦』（正徳５年・大坂竹本座初演）の第４段目「九仙山の場」を再現した細工（模型）である。口上では、この九仙山と絵の左端の「金三重舎利塔」が「当寺第一の宝物」であり、この二つの「宝物」を拝観した者は「三年と三年合て六年の寿命をたもつ」とのご利益を謳っている。

図３（「開帳八」）は本書巻末、開帳（見世物）の

拝観を終えた人たちが出口（「下向道」）へと向かう場面である。絵の右下には「やれやれおもしろい宝物じゃ、しわがのびた」とある。これは絵の右側から出てきた一行の先頭を行く老婆の言葉であろう。彼女の隣には孫の姿も見える。絵の中央部には武士が２人。その背後には「今川家、ねづミよけの守」「辻法印、家内安全之札」「いこま姫、死霊除守」「長吉長太郎、中よしの守」などのお札お守りの広告が見える。これらのお札もすべて浄瑠璃（芝居）所縁のものである。「辻法印」は竹田出雲他作『ひらがな盛衰記』、「長吉長太郎」も同じく出雲他作『双蝶々曲輪日記』、「いこま姫」は近松門左衛門作『井筒業平河内通』である。また、絵の左端には、「八百屋お七」が、恋しさのあまりに放火した時に使った薪が積み置かれている。八百屋お七は西鶴の『好色五人女』で知られるが、浄瑠璃にも紀海音『八百屋尾お七恋緋桜』などがある。

絵の左中央部には浄瑠璃の台本を乗せる見台が描かれており、そこには「竹田出雲、文耕堂」と記されている。本書に取り上げられた浄瑠璃の多くはこの両名の作品である。そして、その見台の横には義太夫が使うと思しき湯飲みが置かれており、その下には「進上、錦文龍、紀海音、長谷川千四、西澤一鳳」と書かれている。この４名はいずれも上方で活躍した浄瑠璃作家である。前者３名は江戸中期の人であるが、最後の一鳳は江戸後期の享和２年（1802）に生まれて、嘉永５年（1857）に死去した人である。上述の通り、福大本には刊記も作者名も記されていない。しかし、本稿に於ける考察を踏まえるならば、本書は江戸時代後期に上方で製作されたものではないかと推測される。そして、その作者も上方の浄瑠璃に通じた人物、例えば本書巻末にその名前が挙げられている西澤一鳳が考えられるのではないだろうか。最後に書名の『霞の海』であるが、浄瑠璃では近松の『日本振袖始』にその用例を見ることができる。

（図３　開帳八）

電子書籍配信サービス「BookLooper」の紹介

日本語電子学術書の利用を目的とした電子書籍配信サービス「BookLooper」を 2014 年９月より運用開始いたしました。

電子書籍配信サービスって何？、いわゆるこれまでの電子ブックとの違いは、などなど疑問点も踏まえた上で、簡単に利用方法、特徴などを紹介いたします。

電子書籍配信サービス「BookLooper」の特徴（従来からある web アクセス型の電子書籍との違い）

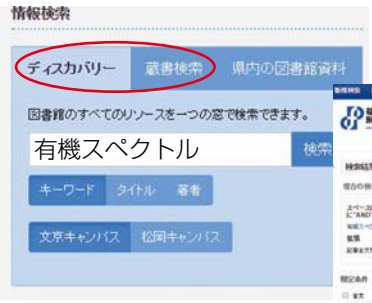
- 貸出・返却機能がある
- メモやマーカーといった学習機能がある（書籍への書き込み機能がある）
- 一旦、返却してもメモやマーカーの情報を個人単位で保持している
- スマートホン・iPad・PC 等から利用できるマルチデバイス対応

などがあり、より学習をサポートする機能を備えています。

■ 簡単な利用方法

日本語の電子学術書です。図書館の本を探すのと同じように検索してください。

① ディスカバリーサービスまたは OPAC（蔵書検索）で検索してください。
② ディスカバリーサービスでしたら「Online Access」または「eBook の全文を見る」をクリック
③ 学術認証フェデレーション（学認）でログイン
④「本棚へ登録」をクリック
⑤ 本の画像をクリックして「読む」を選択
＊実際には、③学認でログインした後②に戻って④、⑤になります。
一度、③学認でログインすれば①、②、④、⑤になります。



1

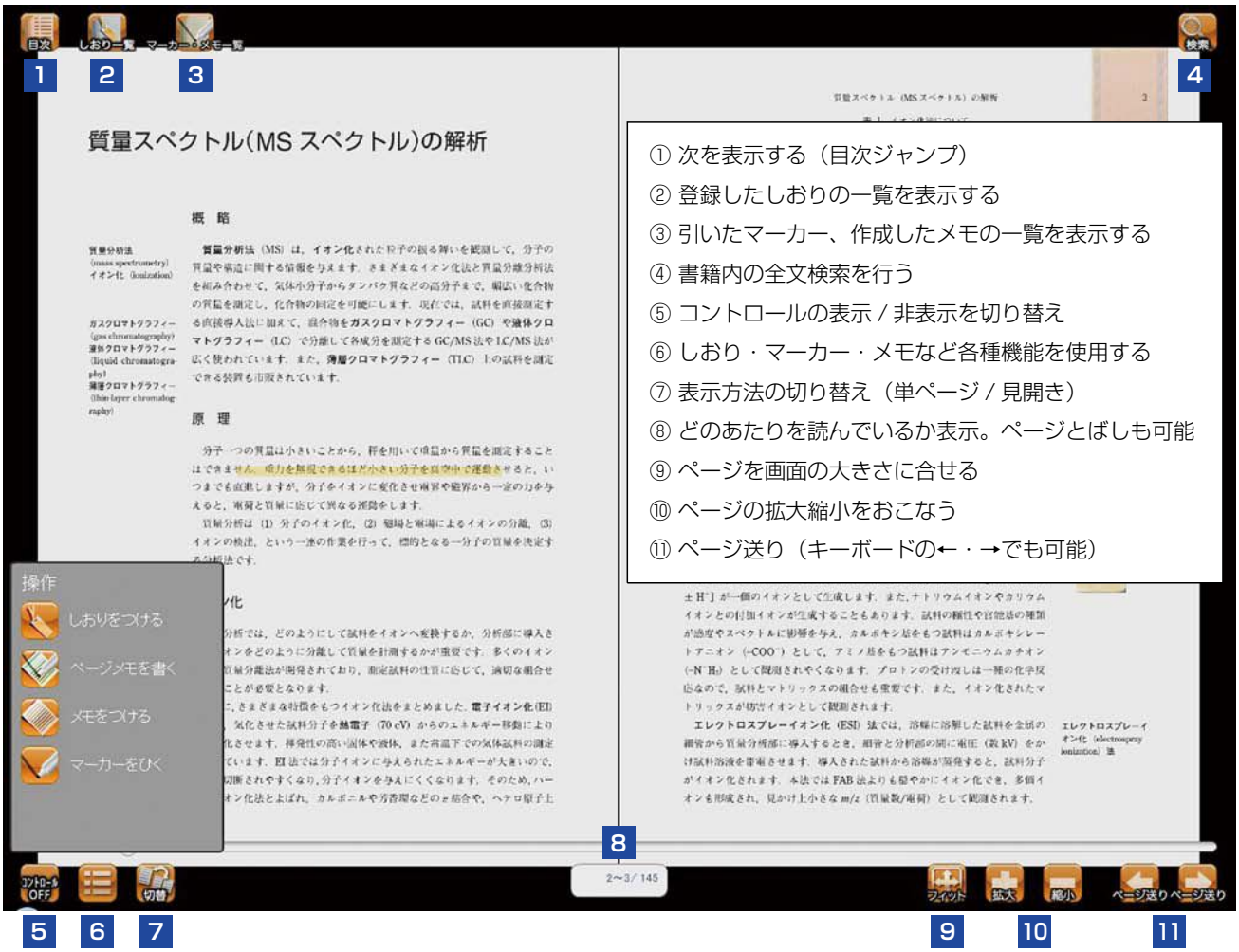
2

3

4

5

ビューアー機能



電子書籍は上記電子書籍配信サービス「BookLooper」の特徴の他にも

- ネット環境があれば、24 時間どこからでも（図書館に出向かなくても）利用可能
- 紙の物理的容量にとらわれない（iPad1 台で、重い専門書を数十冊持ち運べる。）
- テキストの全文検索が可能である

など、紙媒体にはない利点を持っています。

たとえば、図書館で借りた書籍を読んでみて、じっくり読み返して理解する必要があったり、繰り返し利用したい場合は購入を検討するのではないでしょうか。一方、研究やレポートのために大量の書籍に目を通す必要がある場合は、時間と場所を選ばず、物理的容量にもとらわれないで必要な語句を検索できる電子書籍の方が便利なのではないでしょうか。

最後に

日本語電子学術書の普及は海外と比べると遅れています。

英語、中国語など他の外国語の資料が、インターネットで全文を利用できるのが当たり前になりつつある現在、大学図書館が日本語電子学術書を導入することで普及を目指すことは、大学利用者の利便性を向上させると共に、大きな意義があると考えています。

総合図書館展示企画2014

新入生向けの展示“図書館へようこそ” 2014.4.7-5.9

図書館マップを作り館内を細かく紹介しました。“ふくだいプレス”を創刊号から展示したり、黒塗り教科書を展示しました。図書館クイズラリーや図書館ツアーも期間中実施しました。同時に図書館サポーターによる“福大生の日常”をテーマとする展示を展示ホールや閲覧室で行いました。４月から３月の各月をイメージした写真とともに、関連した本を展示しました。

「私を借り展」 2014.8.8-9.30

図書館サポーターによる企画で、過去10年間に一度も貸出されなかった本の中から良書を選び展示しました。多種多様な蔵書をもつ図書館ですが、普段はあまり目にとまらなかった本に注目してもらおうと企画しました。

秋の眠れない夜特集 ～Halloween Pop～ 2014.10.8-11.30

図書館サポーター企画です。秋の夜長をミステリーを読んで楽しんでもらおうと1Fエントランス、3F閲覧室、展示ホールなど館内全体にコーナーを作り、簡単なポップをつけてミステリー本を紹介しました。同時におすすめ本のポップを募集してポップコンテストを行いました。結果は、大賞「限りなく透明に近いブルー」、優秀賞「夢幻花」、グローバル賞「ランタンとつる」でした。

ミニ展示

1．往来物

往来物とは、平安後期から明治初期にかけての初等教科書の総称です。江戸時代に寺子屋等の教育において職業教育、道徳教育、一般教養等などの往来物が編纂されました。総合図書館の貴重書室には、往来物が何十点も所蔵されています。その中から「越前往来」をはじめ数点を展示しました。

2.「絵はがき」でみる昔の福井の風景

福井大学総合図書館が所蔵する古い絵葉書の中から昭和の前期の永平寺や東尋坊、大雪の福井市内など、福井県に関係するものを展示しました。

3. 郷土のいろはかるた

「越前若狭いろはかるた」をはじめ、「越前大野ふるさとかるた」や「ふくいのいろはかるた」、「あかしもんいろはかるた」など福井大学総合図書館が所蔵する郷土かるたのいくつかを紹介しました。

その他

オープンキャンパス（8月8日）には「和装本をつくろう」を開催し、高校生にも和綴による和装本づくりを体験してもらいました。10月には不用本のリユース市を開催しました。古い本が多かったですが、1000冊以上が先生や学生さんの手元に渡っていきました。また“福井大学きてみてフェア”でも「和装本をつくろう」を開催し、和紙と糸を使って和綴じのノートを作成してもらいました。

同時にラウンジでは工学部創成教育活動“本を楽しむ会”による展示「心のキャンバスを彩る不思議な生き物」も行われました。学生らが想像する架空の生物に関連した様々な本を並べました。

11月には論文・レポート本の展示とともにラーニングアドバイザーのおすすめ本を、1月には図書館サポーターの“季節の本　テーマは「雪」“のミニ展示をしました。

展示中心に使用していた展示ホールですが、今年は学生の学習・研究のために、スペースを開放してグループ学習できるように大々的に変更しました。議論や話し合いをしながら学生が学習し、成長する場として活用してもらいたいと思います。展示も館内を利用して様々の形で展開できるとよいと思います。

私の推薦書

英会話の入門に適した指導書 “英語はインド式で学べ！”

総合図書館運営 WG 委員
塩 島 謙 次
しおじま・けんじ

出張帰りの東京駅。駅に隣接する某大型書店の入り口でカラフルな本を見つけました。タイトルにあるインドという文字に惹かれました。インドは数学の分野において 0（ゼロ）の発見、独特な計算術、そして、近年は IT 産業の興隆がめざましいのですが、私の中では英語の分野でも気になる存在でした。学会等でお話しするインドの方々の英語がどうも私にとっては、聞き取りづらく、分かりにくいというイメージを持っていたからです。発音に関しては各国の母国語をベースにした発音になりがちなのは分かるのですが、内容に関しては腑に落ちませんでした。この本はよく使う英語構文の違いに着目してその疑問を解説してくれました。学生の頃からこの種の英語の教本は数多く読んできたのですが、この本は英会話、特に話す英語の入門書として役割だけでなく、日本人の新たな英語上達の切り口を提示してくれたので、ご紹介したいと思います。

この本の前半では英語をとっつきやすく話すいくつかのコツが示されています。現代では、英語のグローバル化が進んでおり、全世界規模でみると英語ネイティブスピーカーの人口は 15%、英語圏外の人口は 85% を占めます。すなわち、色々な種類の英語が存在しており、英語にはそれを許容できるだけの広さがあるということを示しています。この本では、初心者のうちはネイティブスピーカーの話すきれいな英語を目指すのではなく、意思疎通のための道具と割り切る（i 発音は気にしない、ii 単語、文法など新しい暗記はしない、iii 以下の 3 つの動詞で構文を作れるようにする）ことを勧めています。

英語はインド式で学べ!

後半では、3 つの構文、“A sound B”、“誰 find A=B”、“誰 / 何 give 人 物” のみを用いた、英作文トレーニングが始まります。ここで日本人の英作文における弱点が指摘されています。一つ目は、単語だけで答えてしまうことです。お買い物やレストランでは単語だけでも用が足せるので、ついついそこから先のステップアップをサボりがちになっている人が多いと思います。二つ目は、be 動詞と動詞の have を多用することです。その理由としてこれらの動詞は日本語の構文に近いことが挙げられています。振り返ってみますと、確かに他の動詞によりも圧倒的になじみやすい実感が湧きます。しかし、この習慣はネイティブスピーカーからすると、子供っぽい英語に聞こえるのかも知れません。インド英語の場合では、日本人がなじみにくい構文を多用されると、わかりにくい英語に聞こえてしまうのでしょう。私の中で、インド英語に関する長年のもやもやが晴れました。

この本では、まず自分が言いたいことを上記 3 つの構文から一つを選んで表現することから始めます。この際、構文中で言い切れなかった、

積み残した情報は“at”と”with”の２つの前置詞を用いて表すという、大胆なリストラを行っています。例えば、”あの話は本当っぽい”は、“That story sounds true.”と当てはめます。次に、同じ内容を他の２つの構文を用いて言い換えるトレーニングを行い、自分のものにしていきます。”I find that story true.”更に、”That story gives me truth.”と言い換えます。最後に、３つの動詞の仲間、39 個の動詞が紹介され、表現が発展してゆきます。巻末に構文と動詞をまとめた表が付録として付いているのはうれしい限りです。

実際にボストンのホテルでチェックイン時に試してみました。フロントでメンバーシップカードを作ると、インターネット接続料金（1日で＄10）が今回から無料になるというサービスを勧めてきました。今までですと、“Yes, I would like to make a membership card.”とでも応えるところを、”That sounds good!”と試してみました。にこやかな表情で入会手続きを進めてくれました。どれほど効果があったのか、従来までと比較できませんが、私にとってのインド英語デビューでした。

（大学院工学研究科 電気･電子工学専攻 准教授）

英語教育という陥穽
―英語力より教養力を

附属図書館運営委員
高　山　善　行
たかやま・よしゆき

「グローバル社会で活躍するためには英語力が必要」という錦の御旗のもとに、「小学校で英語を教科化」「英語の授業は英語で」「大学入試に TOFEL を利用」といった動きが進んでいる。本学もそうした流れに乗ろうとして、「スーパーグローバル大学」に勇んで手を挙げたが、見事に落選した。「英語教育は、お上の方針や専門家にまかせておけばよい」と決め込み、思考停止に陥ってはならない。「日本人が英語とどう向き合うべきか」を冷静に考えてみる必要があろう。そのための参考図書（及び関連書）を２冊紹介する。

（Ｉ）成毛眞著『日本人の９割に英語はいらない―英語業界のカモになるな！』（祥伝社）

日本人の9割に英語はいらない

著書は元日本マイクロソフト社社長（つまり外資系トップ）であり、グローバル人材の代表といえる人物である。また、膨大な蔵書を有する読書家、キュレーターでもある。本書では、「頭の悪い人ほど英語を勉強する」「早期英語教育は無意味である」「英語ができても、バカはやっぱりバカである」などの主張がなされている。全く妥当な意見である。

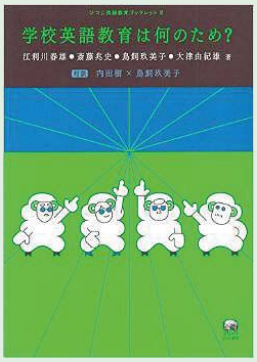
「英語を勉強すれば国際人になれる」という幻想は、英語産業、マスコミ、御用学者等が作り上げたものである。判断力、思考力がないと、このようなデタラメを信じてしまい、貴重な時間やお金を浪費させられることになる。ips 細胞の山中教授にしてもイチローにしても、ただ英語が堪能だから国際的に活躍しているわけではない。大事なのは中身だ。

成毛氏は学生時代からの読書の積み重ねによってグローバル人材になることができた。成毛氏の近著を引いておこう。

「私がかつて一緒に仕事をしていたビル・ゲイツや、彼に限らず、優秀な経営者はみな例外なく大変な量の本を読んでいる。彼らのポイントは「良い本」を「大量に」読んでいることである」『本棚にもルールがある』（ダイヤモンド社）

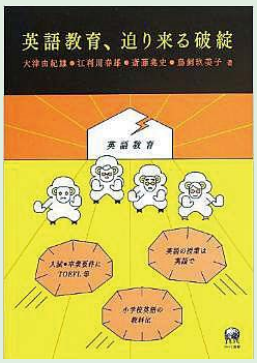
本棚にもルールがある

（Ⅱ）江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由起雄『学校英語教育は何のため？』（ひつじ書房）



学校英語教育は何のため?

英語教育の現実を知る上で格好の書である。英語の研究・実践において一線で活躍する著者４人が、現在の英語教育政策に鉄槌を下す。前著『英語教育、迫り来る破綻』（ひつじ書房）も刺激的だったが、本書では英語教育の目的・必要性についてさらに深く掘り下げられている。



英語教育、迫り来る破綻

本書を読めば、現行の外国語教育政策の旗振り役が経済人であり、学問的裏付けのない、「素人の思い込み」で方向が決められていることがわかる。たとえば、英語力をつけるために、「授業のコマ数を増やせばよい」「ネイティブに習うのがよい」「早く始めればよい」といった意見は、もっともらしく聞こえるが、どれも学問的に正しくない。この点については、ロバート・フィリプソン『言語帝国主義の思想』（三元社）をお薦めしておく。

言語帝国主義の思想

日本の歪んだ英語教育論の根底にあるのは、米国による日本支配の構造である。現実を知りたければ、前泊博盛『日米地位協定入門』（創元社）がわかりやすい。

日米地位協定入門

言語はコミュニケーションの道具であるが、政治の道具にもなる。英語教育で会話に重点を置き、「使える英語」を強調するのは、愚民化政策の常套手段である。（巻末で鳥飼氏と対談している）内田樹氏によれば、大戦中に日本がインドネシアを植民地支配していた頃、現地での日本

語教育の目標は、「日本語が使えるインドネシア人」であったという。今の日本の英語教育と重なるではないか。

さて、本学は、「創造力、実践力」を看板に掲げている（「英語力」ではない!）。創造力の源は思考力であり、日本人は日本語で思考する。教養のない者に実践力は望めない。結局、「創造力」も「実践力」も読書によって培うしかないものである。

たとえば、古典作品は日本人や日本文化を知る近道である。『万葉集』『古事記』『源氏物語』ぐらいは読んでおきたい。日本の近現代文学はもとより、外国文学もメジャーな作品（『カラマーゾフの兄弟』など）は読んでおく。その他、歴史、思想、芸術科学など、読むべき分野はたくさんある。

カラマーゾフの兄弟

英語を勉強するのはよいが、優先順位を間違ってはいけない。英語の勉強は社会に出てからでも間に合う。大学では、読書によって教養力を身につけることが最も重要である 。

（教育地域科学部・言語教育講座　国語学　教授）

なぜローマ人だけが、あれほどの大をなすことができたのか『ローマ人の物語』

医学図書館運営小委員会委員
法　木　左　近
のりき・さこん

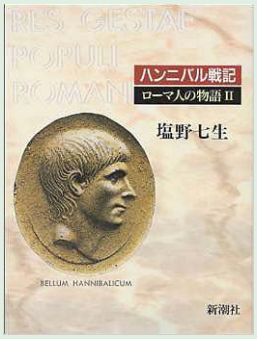
すでに 10 年ほど前の話であるが、高等学校で必履修科目である「世界史」を大学受験に関係無い生徒に履修させなかったため、単位不足となって卒業が危ぶまれる生徒がいることが判明した事件があった。学校の進学率の名誉のために、「世界史」の授業が受けられなかった生徒が一番の被害者でないかと思う。最近では「グローバル化」が流行で、英語教育が重視されているが、本当のグローバル化には世界の歴史を知っておく必要があるからだ。とは言っても、授業で世界史を習わなくても、世界史は学べる。推薦図書の依頼があったので、ヨーロッパ世界の基礎を作った古代ローマの歴史物語をあげたいと思う。

『ローマ人の物語』（塩野七生著）単行本で 15 巻、文庫本では 43 冊と長いが、これには理由が語られている。つまり、この著作のテーマである「知力では、ギリシア人に劣り、体力ではケルトやゲルマンの人々に劣り、技術力ではエトルリア人に劣り、経済力ではカルタゴ人に劣るのが、自分たちローマ人であると、少なくない史料が示すように、ローマ人自らが認めていた。それなのに、なぜローマ

ローマ人の物語

人だけが、あれほどの大をなすことができたのか。一大文明圏を築きあげ、それを長期にわたって維持することができたのか。」を史実に則りながら、考えていくためにこれだけの長さが必要だったということである。

最初から全巻読めるか逡巡する人がいるからもしれない。もちろん途中からでも十分に面白い。あの名将ハンニバルとの対決を描いた「ハンニバル戦記」（第２巻）でもよいし、ローマのインフラストラクチャーをテーマとした「すべての道はローマに通ず」（第10巻）もイタリア観光の背景知識として感心しながら読める。その中でも、私の一番のお薦めは、そしてたぶん、著者も一番筆が乗って書かれたのではないかと推測するが、それが「ユリウス・カエサル」を描いた２巻（第４巻·第５巻）である。



ハンニバル戦記

カエサルというと数々の会戦で勝利した軍人としてのイメージや、三頭政治などの政治家としてのイメージが強いが、興味深いのは、『ガリア戦記』の著者として、文筆家としての記述である。「ともあれこの二千年間、カエサルの業績に関しては意見がわかれないでもなかった史家たちだが、カエサルの文章力についてならば、賛嘆で全員が一致してきたのである。二千年後でさえ文庫本で版を重ねるという、物書きの夢までも実現した男でもあった。」と著者は述べている。ここで改めて『世界史年表・地図　第20版』（吉川弘文館）をみると、「紀元前58-51　ケーザルのガリア征服」とあり、その頃の日本はというと、年表の右端に弥生文化（前期）とあり、軽くショックを受ける。そして、最近の高校ではカエサルやシーザーでなく、ケーザルと呼ぶことにまたショックを受けるのだが、気を取り直して『ガリア戦記』である。今回、推薦図書として迷った本に『モンテクリスト伯』（アレキサンドル・デュマ、1846）があるが、その中でイタリアの山賊の首領のルイジ・ヴァンパが熱心に本を読んでいるシーンがでてくる。その本を問われると「ガリア征討記」で。」「私の愛読書でございまして。」と山賊の首領が答えるのだ。カエサル、畏るべし、である。

モンテクリスト伯

カエサル以外にもこの書に登場する人物は、ローマの敵も味方も含めて何百人にものぼる。ハンニバル、スキピオ・アフリカンヌス、カトー、スキピオ・エミリアヌス、ガイウス・マリウス、スッラ、ヴェルチンジェトリックス、アウグストゥス、ネロ、マルクス・アウレリウス、コンスタンティヌス、スティリコときりがない。歴史好きの定番質問に、好きな戦国武将とか、好きな幕末維新の人物とか、があるが、個人的には、好きな古代ローマの人物というのも定番な質問に入ってもらいたいと思っている。私の好きな古代ローマ人については残念ながら、紙面の都合上、省略するが、これについては、ゆっくりとワインでも飲みながら語り合いたいと思っている。

（医学部医学科　病因病態医学講座　准教授）

医学図書館リニューアル 2014

医学図書館の２階が改装されました！

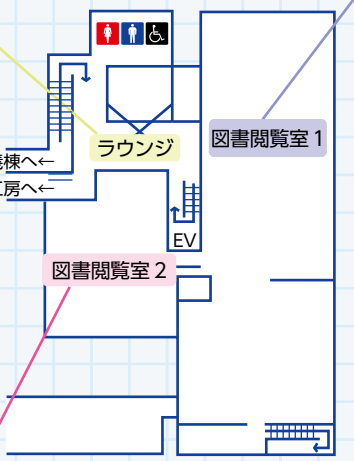
２階ラウンジ

一般の方や患者さんにも読みやすい「心とからだの本」が並びます。視聴覚資料（DVD・ビデオ）で映像を見ると専門知識がより頭に入るかも！？医療系ドラマもあります。

心とからだの本

視聴覚資料

癒しの
ステッカーが。



図書閲覧室１

書架は専門図書専用になり余裕ができました。国試対策本コーナーには医師・看護師・保健師・助産師・USMLEの国家試験に関する本が置いてあります。

国試対策本コーナーも

おまけ

シマウマ
現る。

図書閲覧室２

前の部屋を覚えていますか？壁をとって大幅改装。
新たに設置した書架には、一般図書をまとめました。

一般雑誌もこちら

一人机に仕切りが！

伊崎文庫。椅子に腰かけ、
日本の名作を読んでみては？

皆さん、ぜひ活用してくださいね！

今年も応援しました！

先生からお花も！

国家試験を受ける学生へ、
先生や後輩、職員から
温かいメッセージが集まりました。

医学科６年生
看護学科４年生に
国試合格、応援メッセージ
を書こう！

■ 主な行事等

2014.03.28（金）

附属図書館運営委員会

・平成 27 年度以降の資料整備方針について

2014.05.22（木）

総合図書館運営 WG

・平成 26 年度総合図書館予算配分について

・平成 27 年度の資料整備方針について

・総合図書館の開館時間延長について

・資料の廃棄について

2014.05.26（月）

医学図書館運営小委員会

・平成 27 年度以降の資料整備方針について
　～電子ジャーナル及びデータベースについて～

・平成 26 年度医学図書館予算配分（案）について

2014.11.12（水）～ 14（金）

目録システム地域講習会（雑誌コース）

2014.11.19（水）

附属図書館運営委員会

・平成 27 年度以降の資料整備方針について
　～電子ジャーナル及びデータベースについて～

・学生生活実態調査の分析結果に対する対応について

2015.02.10（火）

総合図書館運営 WG（メール審議）

・総合図書館の開館時間変更（案）について

福井大学附属図書館報 Forum №12　平成 27 年 3 月発行
編集発行　福井大学附属図書館
〒 910－8507　福井市文京 3－9－1　Tel 0776－27－8966